

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究 (近代)

原 卓史

『表現研究』誌上の前回の研究動向は、2012年に執筆された。本稿では、2013年から2015年にかけての研究動向を紹介することとする。

さて、同時代言説を参照し、研究対象とする作品のアクチュアリティを問うといういわゆる共時態研究の流行は、今日もなお継続中であるといっている。査読付き学会誌を頂点とする学会ヒエラルキーを相対化しない限り、こうした動向は延々とつづいていくことになるだろう。それを相対化するためにも、そろそろ通時態研究や、表現研究も含めた他の研究手法への転換が見られてもいい頃なのではあるまいか。

実際、こうした試みによる研究が皆無というわけではない。たとえば、文学の表現機構の研究を精力的に行っている安藤宏を挙げることができるだろう。前回の研究動向を担当した永井善久によって紹介された『近代小説の表現機構』(岩波書店 2012年3月)以降、安藤は立て続けに単著・編著を刊行している。高田祐彦、渡部泰明と共編になる『日本文学の表現機構』(岩波書店 2014年3月)は、古典、近代を超えて日本文学の表現自体の面白さに目を凝らしていく試みであった。『日本近代小説史』(中央公論新社〔中公選書020〕 2015年1月)は、明治以降の近代小説の歴史を、〈表現〉を補助線にして概説した書物である。そして『「私」をつくる 近代小説の試み』(岩波書店〔岩波新書1572〕 2015年11月)は、小

説の「私」に着目することによって、日本の近代以降の小説表現の歴史を概観することを試みた書物である。以上見てきたように、小説表現を通時態で捉え返すことこそ、安藤の試みであったに違いない。

その他、ブルナ・ルカーシュ「日本近代文学にみる「トスカ」—文学概念、そして、文学表現の軌跡を辿って」(『日本文学』2015年6月)は、憂愁、哀愁などと訳されるロシア語の「トスカ」を考察。自然主義以降、文学概念として用いられてきた「トスカ」は文学表現にも採用され、多層的な意味を産出していったことを明らかにした。梅山聡「泉鏡花『龍潭譚』の表現について—〈幼児の意識〉をめぐる—」(『東京大学国文学論集』2014年3月)は、文語文の性質を逆手にとって、「〈幼児の意識〉の形象化を行おうとした」とした上で、「回想形式を無効化する小説」と指摘した。

渡部麻美「堀辰雄「風立ちぬ、いざ生きめやも」—『風立ちぬ』から『万葉集』へ、『万葉集』から『風立ちぬ』へ」(『国文目白』2013年2月)は、「めやも」という表現に注目し、ヴァレリーの詩の訳のみならず、「『万葉集』的な死生観に下支えされた〈魂を鎮める言葉〉」として誕生したものだと指摘した。陳童君「『広場の孤独』の表現方法—堀田善衛における朝鮮戦争と「国民文学」」(『日本近代文学』2015年5月)は、作中の表現方法を未発表資料などと絡めて考察し、堀田の国民文学への志向を考察している。

以上、遺漏が多々あることを承知しつつ、稿を終えたい。

(尾道市立大学)